

2017年（平成29年）

11月例会

日時：11月18日（土）14時より

会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）39号館5F 第5会議室

①講師：法政大学（非常勤） 蒔田裕美

題目：山田耕筈の舞踊作品におけるバレエ・リュスの影響
—総合芸術の観点から—

②講師：日本大学 井上健

題目：占領終結期日本における外国文学翻訳
—カミュとサリンジャーの初訳を中心に—

司会：聖徳大学 近藤圭一 ※①②ともに

12月例会

日時：12月16日（土）14時より

会場：清泉女子大学 2号館 225教室

①講師：上智大学（院） 谷地彩

題目：イギリスから見た近代日本の博覧会
—内国勸業博覧会を中心に—

司会：東海大学 堀啓子

②講師：日本学術振興会特別研究員 金沢友緒

題目：近代ロシア文学にみる愛国主義と異文化受容
—A.K.トルストイ『吸血鬼』を中心に—

司会：中央大学 亀井伸治

2018年（平成30年）

1月例会

日時：1月20日（土）14時より

会場：二松学舎大学 3号館 3041教室

①講師：東京大学（院） 中川映里

題目：短篇小説ジャンルの展開と翻訳文学
—芥川龍之介「春の心臓」を事例として—

②講師：清泉女子大学 有光隆司

題目：木下杢太郎におけるコスモポリタニズム
—詩集『食後の唄』自序を読む—

司会：星美学園短期大学 武田秀美 ※①②ともに

3月例会

日時：3月17日（土）14時より

会場：清泉女子大学2号館 225教室

①講師：法政大学 日中鎮朗

題目：未来小説における虚構と現実の境界の揺らぎ
—ディストピア・小説・現実をめぐって—

司会：日本女子大学（名誉教授） ソーントン不破直子

②講師：日本大学 梅本順子

題目：メイベル・L・トッドの見た日本
—外国人が見た「ツナミ」を中心に—

司会：成城大学 牧野陽子

INSIDE THIS ISSUE

1. 11月・12月・1月・3月例会案内
- 2-3. 例会会場案内
- 4-7. 例会要旨等
8. 東京支部短信

懇親会のお知らせ

12月例会終了後、懇親会を予定しています。詳細は12月初めに支部ホームページに掲載しますので、皆さまふるってご参加ください。

幹事会開催のお知らせ

第2回幹事会：

10月15日（日）11時より、日本女子大学目白キャンパス百年館低層棟1階百103教室にて開催します。

第3回幹事会：

2017年3月例会後、例会会場にて開催します。

（幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長、会計、会計監査です）

役員連絡会開催のお知らせ

2017年9月および2018年3月は午後1時より、2017年11月および2018年1月は例会終了後、例会会場にて開催します。

（役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します）

11月例会会場

早稲田大学文学学術院

戸山キャンパス 39号館5F 第5会議室

〒162-8644 新宿区戸山1-24-1

◆東西線 早稲田駅 徒歩3分

戸山キャンパス正門

39号館



1月例会会場

二松学舎大学

3号館 3041教室

〒102-0074

東京都千代田区九段南2-2-4

◆東西線 半蔵門線 都営新宿線
九段下駅 (2番出口) 徒歩8分

◆JR総武線 有楽町線 南北線
飯田橋駅 徒歩15分

◆総武線 有楽町線 南北線 都営新宿線
市ヶ谷駅 徒歩15分

3号館



11月例会発表要旨

山田耕柝の舞踊作品におけるバレエ・リュスの影響

総合芸術の観点から

法政大学（非常勤） 蒔田裕美

山田耕柝 (1886-1965) は小山内薫 (1881-1928) と共に「新劇場」を結成し、1916年6月に帝国劇場で自作の舞踊作品を上演した。この公演は、日本人による初の西洋舞踊の上演という点で、舞踊史上重要な意味を持つ。船山隆（「山田耕柝の舞踊詩」『音楽芸術』1986年2月）を初めとする先行研究において、山田がベルリン留学中にバレエ・リュス (Ballets Russes) を観て、感銘を受けたことは指摘されているものの、山田の舞踊作品におけるバレエ・リュスの影響については、具体的な検証はなされていない。先行研究の多くは山田の関心がバレエ・リュスから離れ、モダン・ダンスの創始者イザドラ・ダンカン (Isadora Duncan, 1877-1927) に移り、舞踊を創作する上で、山田に決定的な影響を与えたのはエミール・ジャック＝ダルクローズ (Émile Jaques-Dalcroze, 1865-1950) が考案したリトミックであったと結論づけているためである。

しかし、山田が振付けた舞踊のみに焦点を当てるのではなく、舞台作品としての全体像を視野に置いてみると、音楽・舞踊・台本・美術の各芸術形式を融合させようと試みた点において、山田の舞踊作品はリヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner, 1813-83) が構想し、バレエ・リュスにより完全に実現された総合芸術 (Gesamtkunstwerk) に近いと考えられる。本発表では、『山田耕柝著作全集』に収録された舞踊論に表された山田のバレエ・リュス観を確認し、『若きパンとニンフ』(1915) を中心とする舞踊作品の資料を詳細に検証することにより、山田がバレエ・リュスの総合芸術を念頭に置いて舞踊作品を完成させようとしたことを明らかにする。

占領終結期日本における外国文学翻訳

カミュとサリンジャーの初訳を中心に

日本大学 井上健

ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) の解釈学的翻訳論の古典、「翻訳者の使命」(“Die Aufgabe des Übersetzers”, 1923) は、近代日本の翻訳・翻訳文学が論じられる際にもしばしば引用・参照される。偉大な芸術作品がたどる歴史には、「源泉」、「成立」、そして翻訳を介した「死後の生 (Überleben)」という三段階があり、翻訳され、異言語圏において新たな表現を獲得していくことで、原作は「後熟」していく。ベンヤミンのこうした主張が、今日なお示唆に富む知見であることはたしかだろう。だが意外に見過されがちなのは、原文に内在する翻訳可能性の発現により翻訳が可能となる、とするベンヤミンの所論は、当然の帰結として、翻訳の受容者の存在を「後熟」の過程には与らぬものとして、事実上排除してしまっているという点である。作品の「後熟」過程を比較文学の立場から究明するには、翻訳作品の読まれ方に光を当て、歴史的、読者反響的、言語学的、語用論的な評価基準を援用して、翻訳が受け入れられる条件を子細に考察していく過程が欠かせない。時空間を限って、文学表現、言説編成の諸相を、文化・社会との関わりにおいて重層的に見ていくことによって、そうした作業ははじめて有効なものとなる。

以上の視点に立脚して、本発表においては、講和条約が締結された1951年から、講和条約の発効した1952年までの戦後日本に時空間を限定して、カミュ (Albert Camus, 1913-60) の『異邦人』(*L'Étranger*, 1942) と、サリンジャー (J.D. Salinger, 1919-2010) の『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*, 1951) という、戦後日本文学にとって殊更に大きな意味を持ったと考えられる外国文学翻訳作品の初訳二編を取り上げる。二作品それぞれの物語構造、叙法、時制、戦争体験（あるいはレジスタンス体験）の反映、さらにはその翻訳方法などを、対比しつつ検討する。そうした手順を経て、その背後にあるはずの翻訳者の営みと目論見の実相を明るみに出すことで、占領期末日本の文学空間の特質を浮かび上がらせる一助としたい。

12月例会発表要旨

イギリスから見た近代日本の博覧会

内国勸業博覧会を中心に

上智大学（院） 谷地彩

日本と博覧会の関わりは、1867年のパリ万博に参加したことに始まる。そして、明治改元後には、ウィーン万博、フィラデルフィア万博に参加した。その後、国内において1877年に第一回内国勸業博覧会を開催し、計五回開催され、その様子は『風俗画報』に特集されるなど、大いに注目された。

第三回からは外国人招致が行われ、国内での産業振興だけでなく海外へ向けて日本を宣伝する場ともなった。

内国博は、日本が参加した欧米各国の万国博覧会に関する研究の一部として第五回を中心に扱われるか、美術史や経済史、産業発達史などの研究の一要素として捉えられ、内国博に特化した研究は少ない。現在の研究としては吉田光邦『改訂版 万国博覧会—技術文明史的に』（日本放送出版協会、1985）が産業技術史における内国博の意義に言及し、吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代』（講談社、2010）が文明開化や消費文化の問題と関連させて論じている。

内国博に特化した研究には、國雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策』（岩田書院、2005）がある。國は同書を「内国勸業博覧会史」と位置付け全五回の運営状況を分析し、各回の特徴を指摘している。

これまでの研究はいずれも博覧会の内容を中心とするものであったが、本研究では内国博が、海外、特に西欧でどのように受け取られたか、外国人招致が始まった第三回以降を中心に考察したい。西欧の新聞における内国博の注目度や注目のされ方には、日本という国に対する見方が存在すると考えられる。吉見は日本が「欧米の万国博に出展するときには伝統工芸とジャポニズムの国、つまりは非近代の国を装い、国内や植民地の博覧会においては「欧米列強」と同等の近代国家としてふるまっていくという、二重の自己を身につけていったのだ。」と述べているが、日本は欧米に対して意識的に「非近代」を装ったのか、また、日本が近代国家をふるまったという内国博を、西欧ではどう見ていたのだろうか。

今回は英国新聞『タイムズ』を中心に日本の博覧会の見られ方を検討し、併せて日本国内の報道と比較することで意識・認識の差異を明らかにしたい。

近代ロシア文学にみる愛国主義と異文化受容

A. K.トルストイ『吸血鬼』を中心に

日本学術振興会特別研究員 金沢友緒

18世紀、近代国家として未成熟であったロシアは、ヨーロッパ先進諸国の文化を積極的に摂取することによって、自国の成長のための礎を築こうとしていた。

特に世紀後半のエカチェリーナ2世時代には政府主導で留学が推進され、外国文学の翻訳・翻案が盛んになり、先進諸国に倣った教育制度の改革が積極的に試みられた。こうした動きを受けて、19世紀初頭にはナショナリティの追求の一環として、自国文学の確立という課題がより明確なものとなっていく。このプロセスにおいて、フランス革命(1789)、祖国戦争またはナポレオンのロシア遠征(1812)、デカブリストの乱(1825)等の歴史的事件が作家・詩人達に大きな影響を与えた。

以上の歴史背景を踏まえた上で、本報告では、ロシアの貴族作家A.K.トルストイ(1817-1875)の作品、特に『吸血鬼』(1841)を取り上げて19世紀前半のロシア文学の中で愛国主義のモチーフがどのように用いられていたのかを考察する。『吸血鬼』は、トルストイの初めてのロシア語作品であり、従来の研究では近代ロシアを代表するゴシック小説の1つとして認識されてきた。しかしこの作品は愛国主義と異文化受容の関わりが描かれている点でも注目に値する。登場人物には前世紀の美意識や世界観が反映されており、ロシアにおける異文化受容の変遷の縮図も垣間見ることができる。

A.K.トルストイは幼少期からヨーロッパを周遊し、諸外国の文化に親しんでいた作家で、『吸血鬼』には本人の異文化体験が多分に盛り込まれていた。考察に際しては、彼と、特にゲーテやハイネとの関係について取り上げる予定である。

1 月 例 会 発 表 要 旨

短篇小説ジャンルの展開と翻訳文学

芥川龍之介訳「春の心臓」を事例として

東京大学（院） 中川映里

日本近代文学において短篇小説というジャンルが成立、展開するにあたり、翻訳文学はいかなる機能を果たしたのか。その一端を明らかにする試みとして、本発表では、芥川龍之介によるイエイツ作品の翻訳「春の心臓」の検討を行う。

「春の心臓」は、W. B. イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) の幻想的な詩と散文の作品集 *The Secret Rose* (初版 1897、改訂版 1908) 中の短篇“The Heart of the Spring”を芥川龍之介が訳出したもので、1914 年 6 月発行の『新思潮』に掲載された後、1919 年 10 月発行の『解放』に再掲載され、生前の単行本にも二度収められた。芥川自身が作品への愛着を書き記していることもあり、本作品の重要性は、芥川とイエイツ、芥川とアイルランド文学の関わりという文脈で指摘されてきたが、詳細な研究がなされてきたとは言いがたい。その数少ない先行研究のなかでは、不死を手に入れんとする老人とその老人に仕える少年の物語である本作品に関して、「生と死」というテーマや「老い」というモチーフ、古典を現代に蘇らせるというイエイツの手法への芥川の共感という視点が提示されているが、初期の翻訳が中村真一郎や井上健の指摘するように文体修練の場であったことを考えると、訳文体の子細な検討が不可欠だと考えられる。さらに本作品が、世界の名作短篇を広く紹介する目的で編まれた日本初の世界短篇全集、『世界短篇小説大系』（近代社、1925-1926 年）に収録されたという事実は、短篇ジャンルの展開における本作品の重要性を示唆している。

本発表では、訳文の文体的な特徴に注目し、他翻訳者による訳文と比較しながら、芥川がイエイツの詩的な散文の文体を写し取ろうとしているさまを具体的に示す。それによって、芥川におけるイエイツ受容の新たな一面を明らかにするとともに、すぐれた翻訳者としての芥川像を描き出し、「春の心臓」を近代日本短篇ジャンル生成過程で重要な役割を果たした翻訳作品の一つとして位置付けることを目指す。

木下杢太郎におけるコスモポリタニズム

詩集『食後の唄』 自序を読む

清泉女子大学 有光隆司

木下杢太郎は大正 5 年、日本の文壇を離れ奉天に南満医学堂教授兼皮膚科部長として赴任し、3 年後の大正 8 年 12 月、第一詩集『食後の唄』を刊行した。時はすでに『スバル』や『屋上庭園』の時代ではなく、詩壇には萩原朔太郎が登場し、また民衆詩派の詩人たちが活躍していた。いわば遅すぎた詩集ともいえるわけであるが、ではなぜ大正 8 年なのか、その経緯については雑誌『アララギ』に斎藤茂吉に宛てた書簡形式の「満州通信」に詳しい。ところで『食後の唄』には長い自序が付されているが、これも「満州通信」に引き続き、大正 8 年 2 月の『アララギ』に発表されたものである。この自序は大正 7 年 9 月 4 日の「東京停車場ホテル」において執筆されたものであるが、その後半部に「コスモポリタニズム」をめぐる次のような、気にかかる叙述がある。「今、午前、予は停車場ホテルの窓から、初秋の空氣遠近法を見せたる、繁錯なる市街の屋根の海を眺めてゐる。そして獨りで腹立たしく叫んだ。何だつて二年前と今と、こんなに萬事が變つてゐるんだいと。二年前の東京は少くとも予に取つて、こんなに殺風景で、冷淡な處ではなかつた。（略）和辻は予のことを、ひどくコスモポリット臭くなつたと言つた。どうもこんな筈ぢやなかつたんだ。」この「コスモポリット」について、たとえば河村政敏氏は「その性格とする特定の土地への無関心さをあらわす」（『近代詩集Ⅱ』）とざらりと注釈しているが、そのように解釈してしまうと、大正 8 年に「食後の唄」というような遠慮がちなタイトルを付して刊行せざるを得なかった杢太郎の深い心情を見逃してしまうのではないか。本発表ではこのような問題意識から、和辻哲郎による「享樂人」(Genusmensch) という杢太郎観をも踏まえ、『食後の唄』刊行周辺の事情について考えてみたい。

3 月 例 会 発 表 要 旨

未来小説における虚構と現実の境界の揺らぎ

ディストピア・小説・現実をめぐって

法政大学 日中鎮朗

本発表ではカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954-) の『私を離さないで』(Never Let Me Go, 2005)、吉田修一 (1968-) の『橋を渡る』(2016 年)、島田雅彦 (1961-) の『カタストロフ・マニア』(2017 年) を中心に現代の未来小説の特質を従来の未来小説との比較から考察する。現実がどのような形で未来小説 (ユートピア/ディストピア小説、あるいは science fiction) に投入されているか、またその投入形式がもたらす意味をその物語の技法から考察することが主な目的である。

一般に未来小説 (ユートピア/ディストピア小説) は現在の政治、社会状況に対する風刺・批判として機能してきた。また、19 世紀末から 20 世紀に隆盛となる science fiction では「科学技術に魅了され」(Gregory Claeys)、経験的環境とは異なる空想上の枠組みにおいて(ダルコ・スーヴィンによる science fiction の定義)未来あるいは異界 (異星) といった時間・空間的彼方に舞台設定が行われてきた。その際、それらは「この現実」(今・ここ) ではないことが明瞭にわかるように描写上、明示あるいは暗示された。

しかし、これらの小説は未来小説としての機能と特質をもちながら、探偵小説のように描かれる世界が未来であることを次第に読者に発見させてゆく手法を使ったり、「今・ここ」の現実の出来事を小説の中に舞台背景として投入することによって、未来ではなく現在 (あるいは近過去) を舞台にした通常の物語であるという認識へと読者を操作する。いずれも物語それ自体が未来社会という明白な虚構ではなく、現実を描いていると読者に誤読させる手法である。それによって、これらの小説が虚構と現実の境界という枠組みを物語上取り外そうとするだけではなく、「小説という虚構」と「世界という現実」との境界を揺るがすことで文学・小説というジャンルを持続させる現代的試みであることを示している。

メイベル・L・トッドの見た日本

外国人が見た「津波」を中心に

日本大学 梅本順子

エミリー・ディキンソンの詩を世に出した編集者として知られるメイベル・L・トッド (Mabel Loomis Todd, 1856-1932) は、その奔放な私生活 (ディキンソンの兄との不倫関係) で話題になることもあったが、夫がアマースト大学の皆既日食観測隊の隊長を務めたことから、観測目的での来日の折 (1887 年と 1896 年) 同行している。

二回目の観測地が北海道の枝幸ということもあって、先に観測地に向かった夫ら一行とは別行動をとっていたトッドは、通訳一人をつけて北海道を目指す途中、1896 年の明治三陸大津波の被害を見聞することになった。それというのも、乗船した船が被災地への物資の積み下ろしで滞留したことをはじめ、船旅の乗客用の読み物として用意された新聞雑誌は、災害記事が多くを占めていたからである。実際に流れてゆく遺体も目撃しており、その衝撃をエッセイに書いている。後にトッドの見た日本の諸相は、それぞれ雑誌に発表されたのち、*Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-Yacht Coronet, to Observe the Sun's Total Obscuration 9th August, 1896* として出版された。津波についてはこの中に "The Tidal Wave" という章がある。

トッド以外にも被災地を取材したアメリカ人女性がいた。それがエリザ・R・シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore, 1856-1928、後に日本からワシントンへの桜の寄贈に貢献) で、『ナショナル・ジオグラフィック』1896 年 9 月号のために、津波関係記事 ("The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan") を書いている。トッドの「津波」を、シドモアと比べることにより、外国人が被災者をどうとらえたのかを考える。

支部長再任にあたって

東京支部長 ソーントン不破直子

日本比較文学会では隔年6月に役員交代がありますが、東京支部においては、すでにニューズレター121号でご報告しましたように、幹事の多くと事務局長、会計監査が変わりました。支部長は私が再選され、各種委員会委員長も幹事会によって、1年任期の大会準備委員長をのぞき、全員が再選され、二期目を務めることになりました。各役員名は支部ホームページに記載されております。この新体制をどうぞよろしくご支援ください。

2015年6月に私が支部長に就任して以来2年間、ニューズレターの発行回数を減らし、『支部報告』を電子化するなど、編集委員会、企画委員会、会計担当などが頭を寄せ合って働き協力した結果、支部財政の赤字を脱することができました。とはいえこの2年間は『日本比較文学会会報』で既報の「慰謝料請求事件」の関連で、東京支部も不快な思いをしてきました。『会報』にある理事会への「東京支部からの申し立て」なるものの審議は支部総会でなされましたが、総会に出られなかった支部会員はいまだに何のことかと不審に思われていることと存じます。「申し立て」は支部の若い研究者たちが安心して支部活動に参加できる状況を確保するためであることは、近い将来の然るべき時期に然るべき場で説明できることを期待しております。

近年の機関誌への投稿論文の質と量の低下を嘆く声をベテラン会員から聞くことが少なくありませんが、これは日本の政治・社会、教育にまで蔓延する「新自由主義」という、実は全く自由でない流行が、若い研究者に時間と資金を往時のように提供できないからであると私は思っております。支部としては、このような厳しい状況の中でも研究者がよりよい研究成果を出せるようにと、特別企画などで実助言をし、例会・大会で発表の場を提供し続けたいと思います。

今年度の東京支部大会はご案内のように、10月15日（日）に日本女子大学で開催されます。どうぞ皆さま奮ってご参加ください。懇親会などで学会に対する自由なご意見を交換される機会となることも期待しております。なお2018年度の全国大会は、東京支部の日本大学文理学部で6月9日（土）・10日（日）とほぼ決まり、支部としての協力体制を準備しております。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局 (shiina@chs.nihon-u.ac.jp) に氏名、所属、題目、連絡先（メールアドレス、電話）を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送をお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分（質疑応答を除く）です。

日本比較文学会東京支部事務局移転のお知らせ

このたび、日本比較文学会東京支部事務局長の任期満了により、2017年6月18日より椎名正博氏（日本大学文理学部）が新事務局長に就任し、それとともない、東京支部事務局が日本大学に移転いたします。

つきましては6月18日以降、月例会、東京支部大会発表申し込み等のご連絡は下記のところをお願いいたします。

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部 総合文化研究室 椎名正博研究室
TEL/FAX: 03-5317-9715 / 03-5317-9424
E-mail: shiina@chs.nihon-u.ac.jp

日本比較文学会東京支部ニューズレター 122号

発行人：ソーントン不破直子

編集委員会（編集担当）

委員長：西村靖敬

委員：佐々木悠介 高柳聡子 永井久美子 堀江秀史

事務局（発送担当）

事務局長：椎名正博

事務局委員：鈴木美穂 土田久美子 芳賀理彦 畑中健二

福島君子 蒔田裕美 茂木謙之介 森本真一

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部 総合文化研究室

椎名正博研究室

TEL/FAX: 03-5317-9715 / 03-5317-9424

E-mail: shiina@chs.nihon-u.ac.jp